

まさかのトランプ大統領の誕生で世界情勢の行く末に誰もが気をもむ毎日ですが、少しでも平和な世の中が続くことを祈るばかりです

さて、クリニック通信 28 号が出来ましたのでご一読ください。

院長ブログより <<「大きな病院」よりも…>>

日本人は何かというと「大きな病院」が好きなようです。

たとえば、どんな医者が診ても風邪以外にあり得ないと思うような時でも、肺炎や肺癌が心配なので「大きな病院」ですぐに精密検査を受けたいというような人がいます。

でもさすがに風邪くらいで受診されては、重症患者の診療で日夜多忙を極める大病院はたまったものではなく、昨今問題になっている医師の過重労働や医療崩壊の一因となっています。

諸外国と違い日本では、病気になればいつでもどこでも、そしてどんな医療機関にも自由に受診できるというフリーアクセスが特徴的です。この仕組みが世界に冠たる国民皆保険制度と相まって我が国を世界一の長寿国たらしめてきたのですが、皮肉にもこういった弊害を生み出してしまったのです。

さすがに最近では、まず近隣のクリニックを受診し、必要ならばより高度の医療を行える医療機関に紹介してもらうという仕組みが定着しつつあり、昨年の診療報酬改定でも、一定規模以上の大病院に紹介状なしで受診した時は定額の窓口負担が課されることとなりましたが、ある意味当然の成り行きとも言えます。

そもそも「大きな」病院とは何なのか？

誰もが思い描くのは、その地域の中核をなすような総合病院や大学病院で、ベッド数や診療科目が多く、最新の診断、治療設備が充実していることのようにです。さらに、書店に並ぶ病院のランク付け本の上位に載っていたり、マスコミに出るような有名なドクターがいれば完璧でしょう（笑）。

日本人が肩書きやブランドに弱いのは、生来の国民性によるのでしょうか？

私がまだペーペーの研修医のころ、勤務先を尋ねられて〇〇大学病院です、などと答えると、ほー、大学病院のお医者さんですか！などと言われたことがよくありました。言うまでもなく、その方は医師としての私の技量など知る由もなく、私の勤務先に感心していただけなのです。

しかし何よりも忘れてはならないのは、いくら「大きな」病院でも、最終的に重要なのはそこで働く医師や医療関係者ひとりひとりの資質であるということです。ハードがいくら良くても、それを使いこなすのは結局ソフトである人間だからです。

だから、何々病院が有名だからとのことで受診しても、

必ずしも満足する結果とはならないことも多いのは当然です。

例えば大学病院に紹介すると、若いインターンみたいな医者に実験台にされた、などと憤慨される方もいます。言うまでもなくインターンという言葉は既に死語ですが（笑）まあそれはともかくとして、教育は大学病院の使命なので、若い研修医が医療行為に参加するのはやむを得ません。私を含めあらゆる医師たちも皆そうやって育てられたのです。

東京女子医大に在籍中、都内の某病院の心臓血管外科に派遣されていた時のこと、ある中年の男性が心房中隔欠損症と診断されました。患者さんは当然ここでオペを受けられると思っていたら、なんと、色々調べた結果、東京女子医大で受けたいと言われるのです。

この病気は心臓手術の中でも初歩の手術で、心臓外科医を目指す若手医師の登竜門でした。症例数の豊富だった女子医大でも、この手術は私を含め若い医師がほとんど術者をしていました。患者さんの命が最優先ですから、指導医に助手をしてもらいながら万全の体制で行うのは当然ですけれども、少なくとも教授が直接執刀するようなことは、特別の場合を除いて殆どありませんでした。

この患者さんの場合、少なくとも当時は国内トップクラスだった症例数と日本の心臓外科のメッカとしてのブランドで女子医大を希望されたわけですが、この内実を説明したところ、眼を白黒させて驚いていました。

このようなことは、大学病院に限ったことではなく、マスコミで有名になったから、皆が受診しているからと受診しても、3時間待たされて3分診療だったとか、医師の態度が悪かったとか、全然説明してくれなかったとか、色々たらいまわしにされて結局診断がつかなかったとか、枚挙に暇がありません。

いずれにせよ、「ブランドのある病院」や「大きな病院」にかかることと、自分が望む医療が受けられることとは別だということです。

しかし、患者さんにそこまで求めるのはもちろん酷ですから、受診したい医師や医療機関がわからない場合は、いかに良い医師、良い医療機関に紹介できるかということが紹介する側としても「実力」の見せどころとなるわけです。

私も、患者さんの希望は尊重しつつも、長い医師生活を通じて培って来た幅広い人脈を駆使して、出来るだけその人となりや技量を知っている医師を紹介するようにしていますし、その場合病院の規模やブランドなど何の関係ありません。

「いい先生にすぐに紹介して下さい感謝しています」などと言われれば嬉しいものです。



今月の話題「風邪あれこれ」 - 今回は院長より! -

季節柄、風邪（かぜ）が流行っています。

風邪は、誰もが罹るありふれた病気ですが、意外と誤解されている点が多いようです。

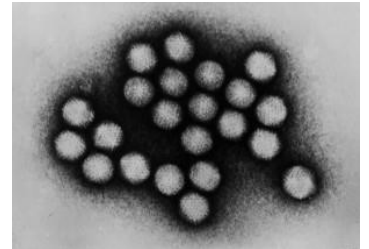
◆ 風邪には抗生物質が効く？

これは誤りです。風邪とは、急性上気道炎と言われるように、上気道（のどや鼻）に炎症が起きて咳やのどの痛みや鼻汁をきたすものですが、その原因の大半はウィルスです。

そもそも抗生物質は細菌（バクテリア）の細胞壁を壊すことにより効果を発揮しますが、細菌と異なりウィルスは細胞壁を持たないので、抗生物質は全く意味がないのです。

しかもその種類はコロナウィルス、ライノウィルスなど 200 種類以上もの多岐にわたり、そのいずれが原因になるかもその都度変わるので、単一のウィルスが原因で起こるインフルエンザのようにワクチンや抗ウィルス薬（タミフルやイナビルなど、抗生物質ではありません）も作れないというわけです。

ただし、高熱が続く、扁桃腺がひどく腫れる、リンパ腺がゴリゴリに腫れている時や、肺炎になりそうな時など、細菌も混合感染している可能性があるときは適切な抗生剤を使います。



◆ 風邪は寒いので流行する？

これはある意味正解ですが、むしろ冬場は湿度が低いので空気が乾燥してウィルスがのどの奥などに住み着きやすいこと、身体が冷えて抵抗力が下がること、人々が外出せず集まりやすいことなどによるといわれています。

◆ では風邪はどうして治すのか？

いわゆる「風邪薬」は、症状を抑えるための対症療法にすぎず、注射や点滴も、水分や栄養を補給する意味では効果はありますが、もちろん特効薬ではありません。

結局のところ、身体の免疫能がウィルスに打ち勝つのを待つしかありません。

発熱は白血球がウィルスと闘うために体温を上げる防御反応であり、少し熱が出たからといってロキソニンなどの強い解熱剤でガンガン下げてしまうと、却って治癒を送らせてしまいます。

しっかり部屋を加湿し、うがいをし（この効果についても賛否両論ありますが）、温かいものを摂取して、ひたすら身体を休めることです。びしょりと汗をかいて解熱すれば、峠を越えたと言えます。

でも、忙しい現代人はそうそう休んでいるわけにもいかないのです、もちろん薬を上手に使っていいのですが、症状を和らげている間に自分の免疫力がウィルスに打ち勝てば治るわけで、薬で根治したようにみえるだけです。



しっかり休むには周囲の人達の協力も必要ですよ。世の男性の方々、奥さんが風邪をひいたら、少しでも家事を手伝ってあげてください！（笑）

なお、薬を飲むなら漢方がお勧めです。漢方は、風邪の自然な治癒過程を妨げることなく症状を軽減しますので、ある意味特効薬に近いでしょう。

私は、風邪の患者さんには西洋薬に加えて漢方を愛用しています。

とはいえ、風邪とて予防に勝るものはありません。普段から栄養、休息、睡眠などに注意して、うがい手洗いを励行、そして気持ちをいつも前向きにして生活しましょう、「病は気から」なのですから。

院長より

事務コラムは今回はお休みです。

☆クリニック通信のバックナンバーをご希望の方は、受付でお申し出ください。
院長ブログは HP からリンクしていますので、他のブログもぜひご一読ください。

おおかど循環器科クリニック

循環器科・呼吸器科・外科

院長 大加戸彰彦

〒651-0055 神戸市中央区熊内橋通 7-1-13 神戸芸術センタービル内医療モール 4F

TEL 078-855-9151 FAX 078-251-5033

e-mail aki-ohkado@ohkado-heart-clinic.com

HP <http://www.ohkado-heart-clinic.com>

診察時間 午前 9～12 時・午後 4～7 時 木・土曜日午後、日祝日は休診